

生田和孝の 手仕事



生田和孝コレクション

北栄みらい伝承館では、生田和孝を顕彰するため平成22(2010)年に常設展示室を開設し、コレクションの中から年間3回の展示替えを行いながら公開している。生田和孝コレクションは、平成4(1992)年、コレクターの川崎忠政氏かわさきただまさなどから35点の寄贈に始まり、実兄・生田観陽氏かんようが美術館建設のため蒐集していた182点や大谷教育文化振興財団等の寄贈を加え現在235点となっている。[令和2(2020)年8月に4点追加寄贈]

生田和孝の足跡をたどると、昭和2(1927)年鳥取県東伯郡中北條村(現北栄町)に生まれるが、陶芸との出会いは終戦後、昭和22(1947)年父の従兄の日本画家・引田逸牛ひきたいつぎゅうの知己で濱田庄司・河井寛次郎かわいかんじろうに近い堀尾幹雄ほりおみきおの勧めもあり、河井に師事すべく京都に出たことに始まる。河井はこの時期仕事を休止していたため一時、河井武一かわいたけいちの指導を受けた後、河井寛次郎のもとで5年間助手を務め技術を習得している。

当時、鳥取では吉田璋也よしだしょうやを中心に「鳥取民藝協会」が設立されるなど、民藝運動が全国的な広がりを見せ、県中部でも、明倫小学校を会場に、版画家・長谷川富三郎はせがわとみさぶろうの企画で柳宗悦やなぎむねよし、濱田庄司、バーナード・リーチが講演を行っている。

河井から独立した生田は、昭和31(1956)年愛媛県の濱田庄司の弟子・阿部祐工あべゆうこうのもとで3か月働いた後、兵庫県多紀郡今田町上立杭(丹波)に移り、市野窯いちのがまで丹波焼の技法を基礎から学び雑器づくりに専念する。昭和42(1967)年日本民藝館展に《海鼠釉鑄手鉢》なまこゆうしのびを出品し奨励賞を受け、この頃から生田の仕事が評価される。また、昭和45(1970)年国画会においては《糠釉鑄手深鉢》ぬかゆうで新人賞を、昭和50(1975)年第3回日本陶芸展では《糠釉鑄手深鉢》を出品し、優秀作品賞(文部大臣賞)を受け高い評価を得ている。その後、昭和57(1982)年11月、55歳でこの世を去った。

生田作品の特徴は、昔ながらの丹波の伝統を継承しつつ、轆轤ろくろ成形した器体に鑄や面取を主に加え、そこに糠釉ぬかゆう、飴釉、黒釉などを組み合わせて登り窯で焼成している。その表現の豊かさは、例えば初期から継続して製作されている扁壺へんこに特徴的にみられる。生田が多用する糠釉は生田の郷里で父・貢みつくが作った籾殻灰と土灰を丹波に運んで作られ、丹波土着のものでなく日本各地の民窯で常々使われていた、いわゆる糠白を基本に生田が使いこなした釉である。生田は55歳という若さで逝去したが、生田が積み上げてきた技術と陶芸に対する熱意は9名の弟子たちに引き継がれ、その魅力を今に伝えている。

大鉢・大皿



6401-001
館釉白流し鍋大鉢

凡例：整理番号
作品名



6201-021

飴釉糠かけ鍋大鉢



6201-013

白釉鍋大皿



6401-003

飴釉白流し鑄大鉢



6401-104

飴釉大皿



6401-115
海鼠釉面取壺



6401-048
黒釉面取土瓶



6401-116
飴釉面取壺(朝倉山椒壺)



6401-064
黒釉面取花瓶



6401-025
柿釉面取瓶



6401-157
掛分面取壺

鎬



6201-016
黒釉鎬手壺



6401-062
掛分鎬花瓶



6401-173
黒釉鎬鉢



6201-006
黒釉鎬手土瓶



6401-118
白釉鎬壺



6401-117
海鼠釉鎬手砵壺



6401-156
掛分扁壺



6401-129
糠釉面取俵壺

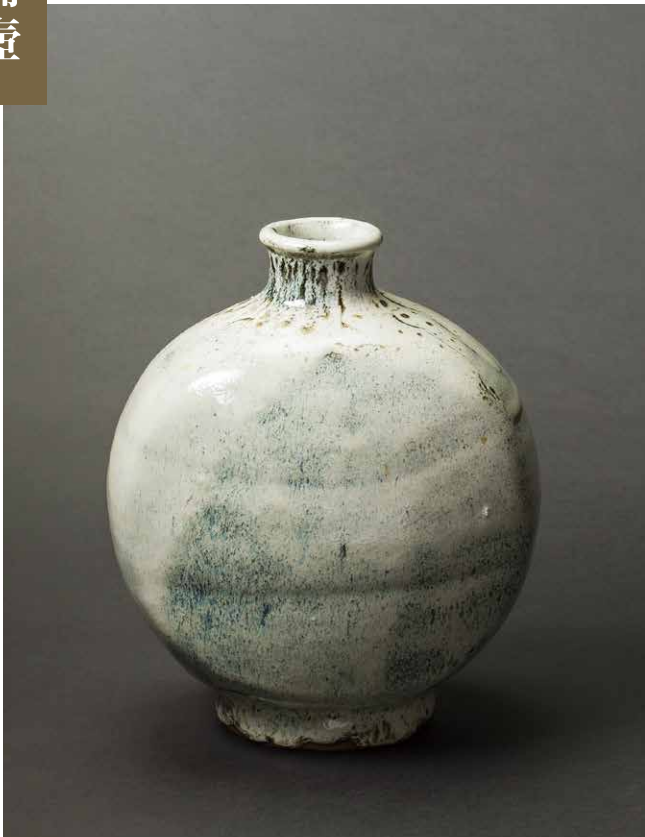


6401-035
黒釉掛流扁壺

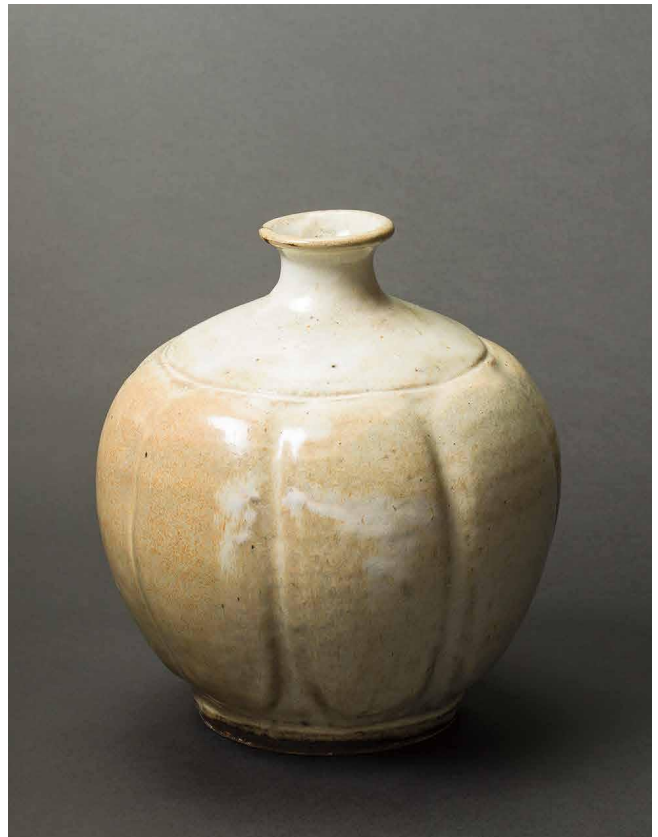


6401-032
糠釉菊文扁壺

扁壺



6401-036
海鼠釉扁壺



6401-020
糠釉瓜壺



6401-030
柿釉扁壺



6401-126
餞釉三筋壺



6201-035
餞釉瓶